ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

ミャンマー保健相 岡山を訪問

歓迎会に100人

ミャンマーのミントゥエ保健・スポーツ相が9月12・13両日、岡山市を訪れた。大臣は協会や岡山大学の医療支援活動のことを詳しく知っており、神戸で開かれたG7（主要7カ国）保健相会合にオブザーバーとして参加した機会に岡山へ足を延ばした。

12日夜、岡山市中区の岡山プラザホテルで催された岡山大主催の歓迎会には、大学や協会、経済界などから約100人が出席。木股敬裕教授（協会理事）の司会で始まり、森田潔学長が歓迎の言葉を述べ、岡田茂・協会理事長の発声で乾杯した。

保健相は挨拶の中で、これまでの人材育成や研究の支援に感謝するとともに、今後の協力を要請した。また、岡山大がまとめたミャンマーとの医療交流についての小冊子にふれて「これをアウンサンスーチー国家顧問にもぜひ見てもらう」と発言。歓迎会に招待されたミャンマーからの留学生16人に対して「素晴らしい岡山大でしっかり勉強し、学んだことを母国に広げてほしい」と励ました。

翌13日は岡山大病院などを大塚愛二医学部長や槇野博史病院長らの案内で視察。公衆衛生が専門の医師でもある保健相は最新の医療施設を興味深く見学し、学生の教育システムに関心を寄せていた。

歓迎会で、小冊子を手に岡山大学の医療支援に感謝するミントゥエ保健相。右端は森田潔学長＝岡山市中区

理事長2話

スーチー氏と同席
首相主催の晩餐会

晩餐会で挨拶するアウサンスーチー氏。右が安倍首相、左手前の横顔が岡田理事長＝東京・迎賓館（デジタル毎日から）

ミャンマー新政権を率いてから初めて来日したアウンサンスーチー国家顧問兼外相を迎えての安倍晋三首相主催の晩餐会が11月2日夜、東京の迎賓館であり、協会の岡田茂理事長が招待された。

主要閣僚や経済人、文化人ら日本側招待客約50人の中で、岡田理事長は安倍首相やスーチー氏らと一緒の正面中央のテーブルに同席。スーチー氏が冒頭の挨拶で、日本は女性の活躍がテーマになっているが、ミャンマーでは男性の活躍が課題と述べたことについて、岡田理事長は歓談でスーチー氏に提案した。

日本には商業、工業、農業などの職業学科を持つ高校があることをあげ、「ミャンマーにはこの種の学校がない。男性が活躍するためには必要と思う」。

これに対してスーチー氏は「その方向で動いています」と答えたという。

マンダレー医大から栄誉博士号

岡田理事長は10月2日、ミャンマー第2の都市にあるマンダレー医科大学から栄誉博士号を贈られた。同医大では、協会の招きによって日本で研修を受けた医師が教授などになって活躍している。この人材育成の功績を称えての授与だ。

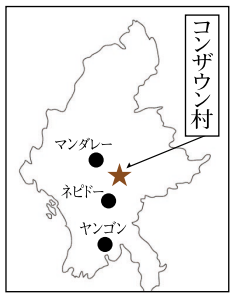
当日は、理事長と旧知のキンマウンルイン学長は訪日中で不在だったが、代わりにエイエイチッ副学長が「これまでの貢献に感謝する」と述べた。式にはミョウキン協会ヤンゴン代表も出席し、昼食をとりながら大学幹部と懇談した。

岡田理事長は2006年にヤンゴン第1医科大学から栄誉博士号を贈られている。

新校舎の前で開校を祝うテープカット＝ピンダヤ

村に待望の小学校
西山さん寄付 長距離通学解消

ミャンマー・シャン州の山岳地帯にある少数民族の村に初めて小学校ができた。



これまで子供たちは片道2、3時間もかけて隣村の小学校に通っていた。それを知った理事の西山央子さんが寄付し、10月14日、大勢の村民が祝うなか贈呈式が行われた。

8千以上の仏像がある「ピンダヤ洞窟」で知られるシャン州ピンダヤ。ここには少数民族のダヌゥ族が暮らす137の村があるが、そのうち21の村には小学校がない。

コンザウン村もその1つだった。約20人の子が険しい山道を通って隣村の小学校に通学しているが、長時間かかるため入学をあきらめる子も多い。村は無医療といってよく、初めてここを訪れたピンダヤ地区病院のタンミントゥ医師からそのような実情を聞いた西山さんは小学校の寄付を思い立った。

贈呈式には村を管轄する地区長官や地区選出の国会議員、それに協会と関わりの深いミャンマー国民健康財団のタンセイン理事長も出席。村民は総出で大鼓をたたいて歓迎、若い女性は民族衣装でバラの花を出席者に手渡した。

「あかね・コンザウン小学校」と名づけられ、先生3人に児童約40人。これまで隣村の小学校に通っていた20人に加え、未就学だった20人が新たに入学した。西山さんは「皆さんが喜び、うれしいことは、私にとってもうれしい」と挨拶し、日本から持参した文具やおもちゃをプレゼントした。

来年、公立校に

来年6月には教育省所管の公立学校になるが、それまでの運営費は西山さんが援助する。

寄稿

ナガという少数民族

首狩り族末裔と思えぬ温和さ

土橋 泰子

どばし やすこ
大阪外国語大学（現大阪大学）ビルマ語科在学中、ビルマ政府招聘留学生としてラングーン大学に留学。元NHK国際放送ビルマ向け番組「やさしい日本語」講師、元東京外国語大学ビルマ語科講師、拓殖大学言語文化研究所講師。著書に「ビルマ万華鏡」、「ミャンマー　こんなとき何て言う？」、訳書に「ビルマの民衆文化」「ビルマ商人の日本訪問記」など。

ナガという民族は、ミャンマーでは北西部ザガイン管区とインドのアッサム地方との国境部、パトカイ山系のナガ丘陵地帯に住んでいる少数民族です。

ミャンマーは国内に135もの少数民族が暮らす多民族国家と言われています。この数字は政府が1983年に行なった国勢調査を基にしたものです。

ただ、ナガ族はそのリストでは、チン族グループ53種族の中の1つとして「ナガ」と書かれているのです。実はこの「ナガ」も単一の民族ではなく、互いに言葉が通じない50以上もの部族に分かれます。タンクン・ナガとか、マクリ・ナガとか、ライノー・ナガとか、それぞれ言葉も衣装も異なった部族たちなのです。

居住地がインド国境なのでインド側にもナガと呼ばれる人たちが住んでいますが、言語学的にはすべてチベット・ビルマ語族として、ビルマ族、カチン族、チン族などと近い関係にあります。

私が初めてナガの人たちと出会ったのは、ミャンマー政府の給費留学生時代の1957年11月、他の学生寮の寮祭に招かれた時でした。当時の政府がナガの優秀な青年をヤンゴンに呼んで高等教育を受けさせており、その人たちが伝統の踊りを見せてくれたのです。ミャンマー奥地に住み、部族間の戦闘では敵の首を獲ったという話で、踊り手がかざす槍、頭や腕の飾りに人の毛髪が使われていて、強烈な印象を受けました。

その翌年2月、ヤンゴンで連邦の日の祭典が行なわれ、各地から民族グループの代表が招かれたのですが、その宿舎に案内して頂けるという好機に恵まれました。そこで再びナガの人たちと出会いました。

奥地から出てきたばかりのおじさんたちがちょうど市内見物にでかける所でした。寮祭の時の正装とは違い、普段着のようで、それでも腕飾りなどには人毛が取り付けられていました。けれども、いわゆる首狩り族末裔とも思えぬ温和な表情で、しかも日本人そっくりなのです。首を獲るのも日本にもあった習慣です。古い文化が残されているのです。残念ながらビルマ語は全く通じず、一緒に写真を撮らせてもらっただけでした。ミャンマーには未だ奥地にこんな独特の文化を持つ民族がいるのだと感じ入ったのです。

民族衣装を着たナガ族の人たちと一緒に。中央が筆者

ところが、外国人にはとても行けそうもないと言われていたナガ丘陵へ行くことができたのです。2003年1月、ナガ丘陵ラヘーという部落でのナガ族新年祭の期間だけ、外国人も入域できることを知り、さっそく申し込みました。国内便空路、船、さらにトラック荷台に積まれての延々の旅でした。これはもう興奮この上なしのお祭りでした。この時嬉しかったのは大抵の人たちがビルマ語を理解し、話せていたことです。

私はその後2度、個人旅行を申請し、レーシー、ソムラなどのナガ村落を訪ねました。その人たちの暮らしぶり見たり、民話等を聞いたりしたかったのです。最近は車の通れる道も延長されたと聞きますが、その頃（2006年）は殆どが徒歩です。その道々はかつてインパール作戦で日本兵が苦渋の敗退をしたルートですが、土地の人にも大被害だったわけです。祖父母世代から聞いた当時の苦労を語るナガの村人も居ました。

行ってみたナガの村々、ラヘーやレーシーなどはナガ丘陵では最大級の村で、その他の村々は小学校もない所が多いのです。ミャンマー本土の地方より、インフラは勿論、教育、医療、すべてが遅れています。ミャンマー本土、マンダレー辺りへ出ようと思えば徒歩で、山越え谷越えてチンドゥイン河畔へ出て、さらに船で飛行場の有る町へ出なければなりません。

私が2003年秋にチンドゥイン河沿いのナガ部落を訪ねていた時も、ナガ奥地への道があるタマンティというチンドゥイン河畔の町の食堂で、奥地から病人を連れてきたクキ・チン族のおじさんと出会いました。病人はその村の集会所に寝かせていて、明日ここを通る乗り合い船でホマリンまで下るとのことでした。何日も高熱で苦しんでいるというおばさんを運んできた様子でしたが、果たして無事に完治されたか、今も気になっています。

そのホマリンにも滞在したことがありますが、ガーゼ1つまともな物は売られていませんでした。薬も偽物が多く、かえって症状が悪くなるという話も聞きました。

医療と教育環境を

経済発展の名の下に、現在は道路も建設されているのでしょうが、信頼できる医療機関、安心して服用できる医薬品、子供たちもせめて中等教育までででも受けられる、そういう環境が早くこの地に来ることを願って已まぬ私です。

協会だより

20人研修終える
准看護師2期生
あかね基金

ミャンマーの農村で働く准助産師（補助助産師）になるため、西山央子・協会理事が設立した奨学金制度「あかね基金」で半年間の研修を受けた2期生20人の修了式が10月17日、ヤンゴンのホテルであった。

仕事の都合で来られなかった4人を除く16人の研修生と先生4人が出席。協会からは西山理事ら7人が参加した。ゾウエイマウン・ヤンゴン地区担当大臣もかけつけ、祝辞を述べた。

修了式には、去年研修の1期生も招かれ、なかにはこの1年間に1人で15例の出産を介助したというひともいた。

「あかね基金」は5年間に毎年20人ずつ計100人の育成を目指しており、今回で40人が准看護師の資格を得たことになる。

正装の民族衣装の研修生たちは踊りを披露＝ヤンゴン

資金援助3回目
西日本高速道路テナント団体

協会の活動資金にと10月、西日本高速道路エリア・パートナーズ倶楽部（片桐悟会長）から100万円が寄せられた。

同倶楽部は西日本高速道路管内のサービスエリアなどに出店しているテナント53社で構成。福祉やスポーツ団体などへ支援をしており、協会にはこれで3回目の資金援助。

編集後記

神戸でのG7保健相会合に出席したミャンマーのミントゥエ保健相がその足で真先に岡山を訪れたこと。来日したアウンサンスーチー国家顧問を迎えての安倍首相主催の晩餐会に、岡田理事長が招待されたこと。この2つは、協会の活動実績がミャンマー新政権にも評価され、また日本政府の関係者にも知られている証といっていいでしょう▼土橋泰子さんに寄稿していただいたナガ族の話。かの国と長く深く関わってきた筆者の、少数民族に注ぐまなざしの温かさが行間から伝わってきました。（西﨑）